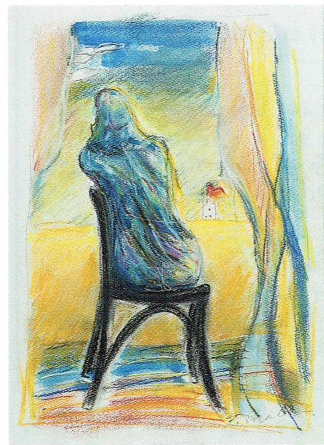


「今生きている」のはあなたの愛の体験

文＝稲葉俊郎 画＝稲葉哲郎



8月20日公開の『ソング・オブ・ザ・シー 海のうた』（トム・ムーア監督）を観ました。アイルランド神話を元にしたアニメーション映画です。とても感動して涙しました。海ではアザラシとなり、陸では女性の姿になる妖精セルキー。セルキーの母と人間の父との間に生まれた兄妹の物語です。妖精と人間など、異なる世界には境界があります。境界は二つの世界を分ける場所でもあり、つなぐ場所でもあります。妹シアーシャと兄ベンは、力を併せて命がけで異なる世界の関係性を取り戻し、生命を取り戻します。主題歌『海のうた』を歌う中納良恵さん（THE OCEAN WRAP）の歌声は光のように映像世界をキラキラと貫通して溶け合っていました。兄ベン役の本上まなみさん、父コナー役のリリー・フランキーさんの声も素晴らしいです。ぜひ劇場で体感して下さい。生命の歴史は海の時代が長く、『海のうた』を何十億年も聞いていました。自然の歌、海の歌、生命の歌は、そっと耳を澄まさないと聞かえてきません。人の体には海の記憶があらゆる場所に残っています。体は、常に今ここにある内なる自然です。心の古層は物語という形でしか伝えることはできず、人は古代の心の声を聴くために神話や昔話やファンタジーを必要とするのでしょう。『ソング・オブ・ザ・シー』では、妹が生まれた直後に母親が姿を消してしまふ謎から始まります。兄は妹のせいだと思ひ、辛くあたります。



生まれた赤ん坊は「愛」という大きなゆりかごで育てられる。自分では覚えていなくても、そこには深い慈しみがあつた

ここで、「生まれる」という現象を改めて考えてみましょう。私達人間は、どんな人でも「必ず誰かの愛を受けなければ、生きることを保てない」という時代を経て大人になります。赤ん坊の時は絶対的に弱い存在で、誰かに頼り守られなければ生きることができません。毎日が命がけの日々。一日を生き延びるだけでも奇跡で感動の日々が続き、大人になります。誰かが食事を与え、衣服を着せ、子守唄を唄い、さまざまな愛を受け続けると、生きることを保てません。今この原稿を読んでいるあなたも含め、今生きている人はすべて、「いのち」には愛の体験が核（コア）に刻印されているのです。ただ、ほとんどの人は始まりの記憶を忘れ、表面にコーティングされた否定的な感情ばかり記憶していることが多いのです。親や兄弟など濃密な関係性を結ぶ間でこそ、距離の取り方は難しくボタンのかけ違いは起きやすいものです。そんなことが病気の遠因になっていることも臨床現場では多々経験します。

な研究（1932年）によると、生後の興奮状態から、生後初めて学習する情緒は3カ月ごろの「不快」であるとされます。その後「快」が枝分かれし、6カ月ごろに不快から「怒り」、「嫌悪」、「恐れ」後に「嫉妬」などが枝分かれします。2歳ごろに人間としての基本的な情緒が、5歳ごろには大人の情緒のすべてが学習されるとされます。生後最初に「不快」を学ぶことは、数知れないのちの危機を乗り越えてきた生命にとって最も重要なことだったでしょう。「生きる」ために、幼少期に否定的な感情を最初に記憶するのは皮肉なことです。

動物学者ホルトマンは、人間は他の哺乳類に比べて1年早く「生理的早産」として生まれると言いました。人間は生後の感覚器官はよく発達していますが、1年早く生まれているために運動能力は未熟な状態で生まれてしまい、一人で自立できないのです。それは、人類が直立歩行をしたことで骨盤が矮小化し、大脳が発達しすぎたせいで頭が大きくなりすぎて、母体から出られなくなったことが原因とされています。人間は、脳の発達を諦めるべきか、生まれるために究極の選択を迫られました。そんな矛盾を解決するウルトラCとして、母体から1年早く外の世界に飛び出して、守られながら外界で脳を発達させる手段を取ったのです。だからこそ、人間は愛によって育まれないと、生きることができなくなったのです。

人間という存在は、赤ん坊や幼少期の時に誰かから無償で与えられた愛の体験が核（コア）となり生きています。どんな人でも例外はありません。人間の生命記憶の中心に愛があるからこそ、その核を周遊するように人生は展開されていくのでしょう。表層よりも、いのちの深層に刻印されている愛の体験は、忘れてはいけないと思います。「今生きている」とは、そういうことです。

妹シアーシャ（Saoirse）の名前は、アイルランド語で「自由」を意味します。人は自由である時、最も美しいのです。子供の時の自由な感覚、日々を切実に必死に驚きを持って生きていた感覚。そうしたみずみずしい感性を思い出し取り戻すために、私達は映画や芸術や神話を必要とするのでしょう。頭の表層が忘れていても、どんな人でも日々命がけで生きた経験を経て大人になるからこそ、試練を乗り越えて生きる光景に私達は感動するのです。海は生命を産んだ母なる存在です。立ち止まってそっと耳をすませば、体のすべての場所からいのちの歌が聞こえてきます。



Profile
稲葉俊郎

いなばとしろう。医師。東京大学医学部付属病院循環器内科助教。東京大学医学部山岳部の監督、洞沢診療所の所長（夏季限定山岳診療所）も兼任。さまざまな伝統医療、補完代替医療、民間医療への造形も深い